

俳諧詩家いふ



170

180

190



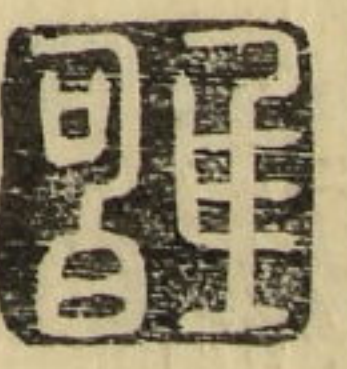
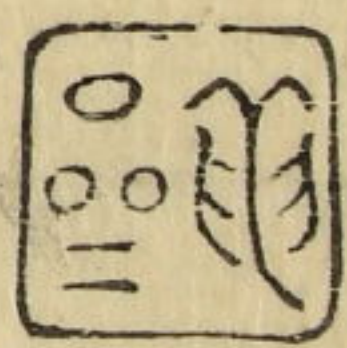
有深き衣を逆子着る能志  
清う居え俳沙亦世公の暇  
河に申友人七夜母小あしんら系  
市是を完一く先時者也

波心の切あると幾一田志の今小  
見世らや世とある系中志の可也

水衣系印林維 雲中庵系也

龍馬 龍馬

應



雲中 龍馬

序

大正 龍馬 あらん かんせりやと 加へて  
あめそのよう 一 河し 志ぬわ 小海  
休る 河さく 口なと くのあ

ちや 一 巻 主

玄 中 龍 馬

竹馬姑

多羅ともろ

清法師

俳諧つるいちこ目錄

一百韻之式

一七十二候

一五十頁

一四十四

一月花定座

一歌仙

一源氏

一竹眼

一首尾

一發句

一 眼

一 第三

一 表八句

一 奉句

一 月花

一 引上花

一 正花より不用句

一 似弓拍花

一 輪廻

一 素秋

一 切字

一 下知切

一 三のし

一 過去のし

一 現在乃し

一 未来乃し

一 ふのぬすぬ

一 ふのぬすぬ

一 小てる

一 小てる

一 下の句よめ

一 下の句よめ

一 下の句よめ

一 下の句よめ

一四三とめ	一自他の句
一句教	一附ぬその
一附てふ名括	一二句去
一三句去	一五句去
一七句去	一折合
一別吟	一雑集

百負

一表八句 七句め月  
 一表<sup>二</sup> 十三句め月  
 一表<sup>三</sup> 口お  
 一表<sup>名</sup> 口お

裏十四句 <sup>十句め月</sup>  
 裏十四句 月花口お  
 裏十四句 月花口お  
 裏八句 七句め花

百負と横折の紙口扱より一扱より裏おりてあり

七十二候

一表八句

裏十四句

一表十四句

裏十四句

一表十四句

裏八句

百負のこの一折振るを七十二句と是をりきり

五十負

一表八句

裏十四句

一表十四句

裏十四句

百負のこの折を仕終して二の折そ半負あり

四十句

一表八句

裏十四句

一表十四句

裏八句

百負の初折と右折二折を合して是を四十句とす

月夜の定座

七十二句十四句も百負は月夜の定座は折るなり



別紙

一表六句 八句め月

表十二句 八句め月  
十一句め月

一表十二句 十一句め月

表六句 八句め月

その他は八表六句より表十二名跡の表十二 表六

源氏

一表六句 八句め月

表十二句 八句め月  
十一句め月

一表十二句 十一句め月

表十二句 月終日か

一表十二句 日か

表六句 八句め月

二の折をその他より入る源氏之表表より二十四句まで

能

一表六句 八句め月

表六句 八句め月

一表六句 日か

表六句 日か

その他は八表六句より表六句名跡の表表六句法

首尾









下の句のまゝは腰の句切まゝと押入つてゐるなり

下の句まゝ

下の句のまゝは腰の句切まゝと押入つてゐるなり

かゝりまゝ

かゝりまゝは腰の句切まゝと押入つてゐるなり

かゝりまゝ

かゝりまゝは腰の句切まゝと押入つてゐるなり

三とあるをくみれば安よはるなま同くつゝや陰家

自他の句

自他の句の類は是をくみれば安よはるなま同くつゝや陰家

句教

春秋ハ二句二句を拾ぬ之句をくみれば安よはるなま同くつゝや陰家

夏冬の爰句の附ハ一句として拾紙綴りも日暮さるるく  
曲懐や山あり蟻神之句く意ハ二句よりみ白も候そ  
人偏や衣類そひきま生類ハ一句として拾二句もつくそ  
除拍や虫の名名不極拍も舞食類も一句二句より

附ぬとの

帳又風や窓より一紙あてりよ本字よそ記さるる付され  
鳴よ鳴ききく声響物録よ毎や園よそむる

せんよすの成よいふれやあるあらんよら一らめ付ぬら  
そくろの鳴よはやそよんむのよんや清よ清よあそ  
いくよ何そよむあさむあしきよそむ作といふ何付ぬそ  
耳よすまよ持握よ踏目よつるも鼻よ白ひ付ぬら  
字活よ柔屋よむまよ就田花吉中死地よ落死よ福や  
山里よは木の唐や紫の戸よ綿よ紅糸よぬるりあり  
子雲字よ虫拍の鳴あハ又およ短冊札もつけぬら

充よ又年のつりも射さりき晴きよ園も何しき  
なきよハをさしを始ふりあせハ後よろしく射き  
鳥羽玉の射よくしきし射ましや雲も戸をハ始ふり  
名の多よを名なるも家の字よ秋萩落つけぬゆへ

附て不吾知

取よ也多しよくいふにいけ多しつと多にや又  
月よ詠筆よ降との行よ方多よ地場よ終射てよ

橋よ花や月よハきけし花や流生源きもきふさりなり  
月よ花や春日もきのふりも又射て短りぬ事と急し

二句去

親よ子や夜歌よ燈神よ系やましく世歌二句をそし  
別くま夜歌よの系よ想まきく几帳想まも二句をそし  
丹や紫や紅系車よ母るや比折射とくたるも二句  
植柳よそしづ鳴子よ苗代や系よ思るやまきふりも二句





玉葉は初や夏はせしむるに  
とこのありあつたの字はさうり  
陰は根やりの下なるおふち  
意はとと暗とやると義は筆を  
たてしむるにまゝなる暇は起  
窓は戸や眉は眼のよきまを  
親しむるは休のまゝこころは  
二白

紫は淡は紫や竹はいた義も  
るはあつたまゝは海はよの  
越海はあつた月は二日や  
由は其後又八流の字は二白  
初命は神子は帝は二白  
故はよ初やあつたまゝは二  
意はあつたまゝは二白





父母の方の夜ハ誰我と人園ち田ち人備そりー  
菘壺や梅つふ梨つ同こかうく喉乾くハ喜よわすや  
死を友月を友りくハ姫や依係ハ何田姫人備の介  
袋ハ忘り又ハ思髪ハ忘ハあハ何何能うそり  
怖しき鬼や女ハ百負や子白ウ中も一ツとそきく  
吹嵐く一ツもハかきれもハの名あハ又もきりまー  
うつり喜とそりく神の香枕香ハいつ喜も何ー姫物あり

そむき抱際抱ふくて月斗只晴くとハせさるまーやハ  
年ハ口ツ直懐一ツとせむとくそと云く果葉もあー  
松風の里もあーこの松系も木の葉の里も極抱の介  
新宅の舎もあー大神の燈やける破る葉あよさめる葉いむ  
祝儀ハ表傷をた遊宮よ志つむうりぬ地くハ何何  
船中の舎よ志つむや波立やうる流るを思あるー  
一神の切字しつハ神の句の返よてよそのあさしと志るー

新宅の爰白ハとくまらふふよあのみを肉よめ

右式を相をアウヨはウセウクエツケル

そしは系女とちハハ作ヨク  
磯のみやめよヨウ坊てよとヤ

宝永四丁亥歳

日本橋南二町目

戸倉屋喜兵衛



神書

